

新潟大学人文学部・公的英語検定試験対策授業  
「実践英語研究」授業実施報告

高橋 歩

A Report on a TOEIC Preparation Class  
“Advanced Practical English”

Ayumi TAKAHASHI

This paper reports the results of a TOEIC preparation class, “Advanced Practical English,” over a three-year period. It summarizes the methodology of the class, the results of mock tests administered during the class time, and the results of the actual TOEIC tests. The average scores from both mock and actual TOEIC tests increased toward the end of the class, suggesting that this class may be effective in preparing students for TOEIC tests. The analysis of the test results found that students were relatively good at the reading section in the earlier stage of the class, and that their reading scores rose somewhat toward the end of the class. Students were found to be weak at the listening section earlier, but their listening scores increased remarkably toward the end of the class.

Key words: TOEIC, mock TOEIC tests, reading skills, listening skills

1 はじめに

新潟大学人文学部は、平成 12 年度に3・4年次学生を対象として「実践英語研究」という授業を新設した。当時、公的英語検定試験の成績が新潟大学の単位として正式に認定されるようになり、このような試験を受験する学生が増加することが予想された。当該の授業は、そのような学生を支援する目的で開設されたものである。

本報告は、平成 12 年度以来、3年度にわたって行われてきた「実践英語研究」の授業成果を、各年度のデータを比較しながら報告するものである。

2 授業の趣旨と TOEIC について

「実践英語研究」は、現行の多くの公的検定試験の中から特に TOEIC (Test of English for International Communication、国際英語コミュニケーション能力テスト) に絞って、そのスコアを伸ばす訓練を行うことを目的としている。TOEIC は、アメリカのテスト開発機関 ETS

(Educational Testing Service) で開発されているもので、現在世界 60 カ国で利用されており、最も国際的な検定試験の一つと言える。TOEIC 公開テストは日本では年 7 回実施され、現在までに累計 898 万人が受験してきた。分野を問わず、様々なレベルの受験者の英語力を正確に位置づけることができ、この優れた特徴から、日本国内の一般企業や官公庁で、英語能力基準の設定や新入社員研修など様々な形で利用されている。

3 授業計画

「実践英語研究」は、第 1 期に開講される半期の授業である。各年度とも授業スケジュールは以下の通りである。

第 1 回 オリエンテーション

TOEIC 公開テストについての基礎知識

第 2 回 第 1 回 TOEIC 模擬テスト

第 3 回 リスニング・セクション

パート 1 写真描写問題

- 印刷された写真を見ながら、それについて4  
つの英文を聞き、適切なものを選ぶ問題
- 第4回 リーディング・セクション  
パート5 文法・語彙問題(1)  
問題文の空欄に入れるべき語句を4つの選択  
肢から選び、未完成の文を完成させる問題
- 第5回 リーディング・セクション  
パート5 文法・語彙問題(2)  
問題文の空欄に入れるべき語句を4つの選択  
肢から選び、未完成の文を完成させる問題
- 第6回 リスニング・セクション  
パート2 応答問題  
質問とその答えの3つの英文を聞き、適切な  
答えを選ぶ問題
- 第7回 リーディング・セクション  
パート6 誤文訂正問題(1)  
問題文に示された4つの箇所から、訂正すべ  
き部分を選ぶ問題
- 第8回 第2回 TOEIC 模擬テスト
- 第9回 リーディング・セクション  
パート6 誤文訂正問題(2)  
問題文に示された4つの箇所から、訂正すべ  
き部分を選ぶ問題
- 第10回 リスニング・セクション  
パート3 会話問題  
会話を聞き、質問に対する適切な答えを、4  
つの選択肢から選ぶ問題
- 第11回 リーディング・セクション  
パート7 読解問題(1)  
英文を読み、質問に対する適切な答えを、4  
つの選択肢から選ぶ問題
- 第12回 リーディング・セクション  
パート7 読解問題(2)  
英文を読み、質問に対する適切な答えを、4  
つの選択肢から選ぶ問題
- 第13回 リスニング・セクション  
パート4 説明文問題  
説明文を聞き、質問に対する適切な答えを、  
4つの選択肢から選ぶ問題
- 第14回 第3回 TOEIC 模擬テスト

第1回授業時にオリエンテーションを行い、TOEIC  
の特色、問題のタイプと構成、スコアと英語能力レベルな  
どの基礎知識について説明した。TOEIC の受験経験の  
ない学生も多いと考えられたからである。また、学期中に  
3回模擬テストを行い、受験者の平均スコアの変化を調査  
した(4.4TOEIC 模擬テスト参照)。

TOEIC 公開テストは、リスニング・セクション(パート1～  
4)100 問及びリーディング・セクション(パート5～7)100  
問の合計7パート 200 問から成る。模擬テスト以外の週は、  
1回の授業で1つのパートを取り上げ、そのパートに的を  
絞って訓練を行った。授業回数の都合上、リスニング・セ  
クションの各パートに1回、リーディング・セクションの各パ  
ートに2回の時間を割り当てた。

#### 4 授業の実際

##### 4.1 受講学生数

受講学生数は、平成 12 年度 41 名、13 年度 42 名、14  
年度 42 名でいずれも人文学部3・4年次学生であった。

##### 4.2 教材

使用したテキストは各年度とも The Complete Guide to  
TOEIC (Bruce Rogers 著、International Thomson  
Asia ELT、1997) である。授業は、テキストに加え、練  
習問題用の補助プリント数枚、TOEIC 練習用のテープ  
数本及び CD 数枚を併用して進められた。

##### 4.3 語彙リストと単語テスト

語彙力を強化するため、TOEIC 頻出単語リストを配布  
し、その中から毎週約 60 語を翌週までに覚えてくるよう指  
示した。翌週の授業開始時に単語テストを行い、指示した  
単語リストの中から 10 問を出題した。最終講義が終了す  
るまでに提示された単語数は 650 語以上になった。

##### 4.4 TOEIC 模擬テスト

学期中に合計3回の TOEIC 模擬テストを実施し、学生  
のスコアの変化を調べた。各年度における平均値の比較  
が可能のように、すべての年度の各回で同じ模擬テストを  
使用した。

第1回模擬テストは、オリエンテーション行った翌週の第2回授業時に、第2回模擬テストは、学期の中頃、第8回授業時に、そして第3回模擬テストは、最終授業時に実施した(3授業計画参照)。模擬テストは、90分という授業時間内で終わらせるため TOEIC 公開テスト(120分)の70%の問題数で実施した。

第1・2回模擬テストを実施した翌週または翌々週に、各学生にテスト結果を通知した。模擬テストのスコアに加え、学生が TOEIC 公開テストを受験する際の参考になるよう、TOEIC 換算スコアを通知した。さらに、学習意欲高揚のため及び各学生が学習を進めていく上での参考となるよう、模擬テストにおいて各自が特に良くできていたパート、あまりできていなかったパートを併せて示した。第3

回模擬テストは授業最終日に実施したため、初年度は学生にスコアを通知しなかったが、13年度からは、希望者に電子メールで通知するようにした。

#### 4.5 成績評価

TOEIC 模擬テストスコア、スコアの伸び及び単語テストの点数とを合わせて評価した。

### 5 授業実施の結果

#### 5.1 模擬テストスコアの変化

次の表は、各年度の模擬テストスコアの変化を示すものである。

表1. 模擬テスト平均スコアの変化

	平成 12 年度	平成 13 年度	平成 14 年度
第1回	90(40/50)	88(39/49)	94(42/52)
第2回	98(49/49)	97(48/49)	102(51/51)
第3回	106(53/53)	106(53/53)	106(53/53)

\* 合計点(リスニング点/リーディング点)

\* 満点は 140(70/70)点

「実践英語研究」では、TOEIC 公開テストのスコアを伸ばす訓練を行うという趣旨に照らして授業を行った。各模擬テストによって難易度に違いがあった可能性はあるとはいえ、すべての年度において全3回のテストの平均スコアが回を増す毎に上昇していることがわかる。

セクション毎の平均スコアに着目すると、各年度において第1回模擬テストでは、リーディング・セクションのスコアがリスニング・セクションのスコアを大幅に上回っていることがわかる。しかし、第2・3回では、両セクションでほぼ同等のスコアが確認されている。このことから、受講前の時点で、リーディング問題を解く能力より全体的に低かつ

たリスニング問題を解く能力が、本授業の受講を通して、最終的にはリーディング問題を解く能力と同じレベルにまで向上したと考えられる。

#### 5.2 TOEIC 公開テストスコアの変化

授業で行っている訓練が TOEIC 公開テストのスコア上昇に役立っているかどうかを調べるため、平成13年度及び14年度に、学期中に2回(5月・7月)実施される公開テストのスコアを調査した。

表2は「実践英語研究」受講者の TOEIC 公開テスト平均スコアである。

表2. TOEIC 公開テスト平均スコアの変化

平成 13 年度	平成 14 年度
5月 38 名受験 496.6(276.2/220.4)	5月 40 名受験 550.8(293.5/257.3)
7月 27 名受験 559.4(323.7/235.7)	7月 39 名受験 597.4(330.5/266.9)

\*合計点(リスニング点/リーディング点)

\*TOEIC 公開テストの満点は 990(495/495)点

平成13年度には公開テストの受験を義務付けていなかったため、7月に受験者数が減少している。この公開テストが大学の定期試験と同時期に実施されたことが原因だと考えられる。14年度には受講学生に、学期中に実施される2回の公開テストの受験を義務付けた。

「実践英語研究」受講後1ヶ月半ほど経過した5月末の公開テスト平均スコアと、受講終了後7月末の平均スコアを比較すると、13・14年度ともスコアが大幅に上昇している(13年度は62.8、14年度は46.6ポイント上昇)。このことから「実践英語研究」は公開テストのスコアを上昇させる効果を有し得るものであったと考えたい。

年度毎のスコアに着目すると、模擬テストのスコアと同じ傾向が見られる。つまり、13年度は14年度より始めの平均スコアが低い、次のテストでのスコアの上昇が大きい、という傾向である。この原因としては次の2点が考えられる。

まず、始めの時点で英語力の低い学生の方が、受講終了後のスコアの上昇が大きくなる、という可能性である。5月のテストでは、13年度の学生の平均スコアは14年度のスコアを54.2ポイント下回っている。ところが7月には、その差は38ポイントに留まっているのである。13年度7月の公開テストは受験者数が少なかったため、この数字は多少差し引いて考えなければならぬかもしれない。しかし、模擬テストの結果を考え合わせてみても、受講前の時点で英語力が低く、そしておそらく公開テスト受験経験のない学生が、本授業の受講を通してTOEICの問題形式に習熟し、また問題を解く能力を身に付けたと考えられるのである。

次に、13年度の授業内容の方が14年度のものよりスコ

アを伸ばすのに効果的であった可能性である。前述したように、授業内容はすべての年度で基本的に同じではあったが、年度毎に少しずつ変更を加えた箇所もある。このことが結果的にスコアの伸びの違いに影響を与えたのかもしれない。この点に関するデータが更に蓄積されていけば、より細かく適切な授業内容を定めていくことができるようになるだろう。

セクション毎のスコアの変化にも模擬テストと同様の傾向が見られた。つまり、両年度において、リスニング・セクションの方がリーディング・セクションよりスコアの上昇が大きかったという点である。リーディング・セクションのスコアの上昇は、13年度で47.5ポイント、14年度で37ポイントであった。それに対してリーディング・セクションのスコアの上昇は、それぞれ15.3ポイント、9.6ポイントであった。

リスニング・セクションのスコアが大幅に上昇した理由としては次の2点が考えられる。つまり、TOEICのリスニング問題慣れとリスニング能力そのものの向上の二つである。受験者は模擬テストの回を重ねる毎に、また授業でリスニング練習を行い、さらに授業時間外の課題をこなすことにより、問題を解く能力を向上させると共に問題形式やスピードに慣れていき、そのことが平均スコアの大幅な上昇に繋がったと考えられる。

リスニング能力と比較すると、TOEICで計測されるリーディング能力は、短期間で身につけることが難しいのかもしれない。「実践英語研究」受講学生は、受講前から比較的高いリーディング能力を有していたということも、このセクションのスコアがリスニング・セクションほど上昇しなかった理由となり得る。しかし、逆に考えると、彼らのリスニング

能力がいかに低いか、あるいはまた彼らがいかに TOEIC で出題されるようなリスニング問題に慣れていないかを示すものでもあるのである。

## 6 結論と今後の課題

模擬テストのスコア及び公開テストのスコアを調査しながら、3年間「実践英語研究」を担当してきた。この経験から、TOEIC 公開テスト対策として以下の諸点を提案する。

1. 問題の形式と傾向を熟知させること。
2. 頻出単語を覚えさせること。
3. リスニング・セクションでは問題を解くタイミングを体得させること。また設問のパターンを覚えさせること。
4. リーディング・セクションでは時間配分を体得させること。
5. 常に得点向上の意欲をかきたてる工夫をすること。

今後の課題としては、次の諸点が挙げられる。

まず、リーディング問題を解く能力をより向上させる授業方法の開発である。

さらに、能力別(TOEIC スコア別)指導の実施である。本来、このような性質の授業は、複数の授業を開講し、学生を能力別に振り分けて指導を行うのが望ましいと考える。実際「実践英語研究」においても、個々の公開テストスコアに大きな差が見られた。13 年度5月では、最高点が620 点、最低点が345 点であったし、14 年度5月では、それぞれが840 点、350 点と、約500 点の開きがあった。公開テストスコア 840 点の学生と 350 点の学生では、受験経験及びリスニング力、リーディング力に大きな差があり、同じ指導をしたのでは双方のスコアを効果的に伸ばすことはできない。スコア別指導を行うことで、スコアの低い学生もスコアの高い学生も、効果的にスコアを伸ばすことが可能になるはずである。